

筑波大学所蔵『連歌新式追加並新式今案聞書』について

綿 拔 豊 昭

要旨

連歌の式目の研究については、木藤才蔵氏によって進められたところが大きい。連歌新式の注解についても同様である。諸本についても多くを紹介されている。筑波大学に連歌新式の注解が一点所蔵される。江戸幕府の連歌師であった里村昌琢の講釈の聞き書きである。これについては従来紹介されることのなかったものである。それには多くの書入れがなされている。特に里村昌陸の言説を記した書入れが多い。江戸時代の連歌史において昌陸は、重要な位置をしめる。その言説が知られる筑波大学の所蔵本の資料的価値は高いといえよう。

はじめに

木藤才蔵氏の連歌研究で重要な位置を占めるのが「連歌新式」についてである。それは『連歌新式の研究』（平成十一年四月、三弥井書店）としてまとめられた。また、木藤氏は、連歌研究に有益な翻刻等を多くなされており¹⁾、それは「連歌新式」についても例外ではない。『連歌新式の研究』の「第五章 連歌新式注解書の研究」では、1天文十七年注、2永禄十二年注、3連歌式目抄（紹巴の注）、4心前の注、5新式聞書（従正允伝授注）と新式注（源俊奥書注）、6昌叱の注・昌琢の注、7連歌新式増抄、8玄節の注・最上義光の注、9幽閑斎玄固の注、10連歌新式秘抄（昌叱・昌親の注）、11天理図書館所蔵『連歌新式鈔』、12昌純の注（拾螢抄）の十二点の注釈書を取りあげられており、このうちの「1天文十七年注」を同書におさめている。また木藤氏が編まれた『連歌新式古注集』（昭和六十三年十二月、古典文庫²⁾）では、右の「2永禄十二年注」、「3連歌式目抄（紹巴の注）」、「4心前の注」の翻刻がおさめられている。「7連歌新式増抄」は『京都大学蔵 頼原文庫選集 第三巻』（平成二十九年、臨川書店）に、「8最上義光の注」は『翻刻資料6 最上義光注 里村紹巴加筆 連歌新式』（平成二十一年三月、最上義光歴史館）に翻刻がなされているので、残りの連歌新式注解書の翻刻等がのぞまれるが、右の連歌新式注解書のうち木藤氏旧蔵書は国文学研究資料館に寄贈されており³⁾、現在、所定の手続きをふめば原本を閲覧することが可能であり、少なくともデジタル化されたものは閲覧が容易である。

さて、木藤氏は、ひろく「連歌新式」の注解を調査されていたが、『連歌新式の研究』にとりあげられていない「連歌新式」の注解がある。筑波大学に所蔵される『連歌新式追加並新式今案聞書』がそれで、系統としては「昌琢の注」

にあたり、本文そのものは新出ではないが、少なからずの書入れがなされており、その点が注目されるものである。里村家の連歌字を知る上では看過できないものと考えられるので、ここに『連歌新式追加並新式今案聞書』について紹介させていただきたい。

一

まず簡略ながら書誌について述べる。

袋綴、写本一冊、虫損あり。五つ目綴じで、綴じ糸から推して後に綴じ直されたものと考えられる。

表紙（縦二七・五cm、横二〇・二cm）を覆っていたあさぎ色の薄紙がほぼ剥落し、その下にあった、漉き返して作成された厚手の無地の紙となっている。左肩に「連歌新式追加並新式今案聞書」と墨書された、後補の題簽（縦一八・七cm、横三・二cm）が貼られている。また本の下の箇所、いわゆる「地」に「新式聞書」と墨書されている。この墨書は、題簽よりは古いものと思われるが、平積みで保管するなどのために便宜上書かれた略称と考えるべきであろう。

題簽は後補のものであり、正しくは「連歌新式追加並新式今案等聞書」と「等」を入れるべきであるが、他に書名にあたる記述がないので、筑波大学での整理書名は「連歌新式追加並新式今案聞書」としている。

見返しは本文と同じ料紙が用いられており、後表紙見返しには「佐草蔵書（方朱印）」とある。「佐草」は後述の書写者であろう。

もともと首尾一丁ずつあてられた遊紙のうち、はじめのものの裏に以下のように書き込みがある。

累年連歌師誤^テ以^ニ今案^ヲ一為^ス二肖柏ノ説ト一非^ルコト二肖柏ノ説ニ一

以^ニ肖柏之奥書^ヲ一可^レ考^レ之

これは『連歌新式追加並新式今案等』の「今案」は、本来一条兼良の説であるが、長年「連歌師」は肖柏の説と誤っている、との意であろう。ここでの「連歌師」が具体的に誰を示すかは不明であるが、書写者の知る者と考えられるならば、近世の連歌師の一部ということになる。筑波大学所蔵本には、朱書きの書入れが多くあり、それには「今案」「追加」「肖柏ノ詞」「聞書」が多くみられる。どの箇所が「今案」「追加」「肖柏ノ詞」であり、「聞書」であるかを示すものであり、こうした書入れが必要であったことがうかがわれる。

本文全七九丁で、一面十行、字高は縦二二・〇cm、横七・五cm。「連歌新式追加並新式今案等」の本文があり、それに対する「聞書」の箇所はほぼ二字下げで記されている。

巻末に以下のようにある。

慶安弐年霜月十一日ニ遂書写功畢

此一冊予在洛之節從里村昌隱伝写之

佐草直清(花押)

右により、本文の書写は、慶安二年(一六四九)十一月十一日に京都の里村昌隱のもとで佐草直清によって行われたことがわかる。書写者の「佐草直清」については不明である。昌隱は里村南家の連歌師で、慶安三年(一六五〇)没、享年五十歳。「昌穩」とも名乗る。

『連歌新式追加並新式今案聞書』の内容については、まず本文最初に

法橋昌琢 元和三年仲秋廿七日ヨリ講尺已上三日

とあり、さらに本文中に「文龜元年ヨリ元和三年まで百十七年也」とあることから、昌琢によって行われた「連歌新式」の講釈の聞書であることがわかる。

奥書に見られた昌隱の父は祖白（昌通）で、祖白の父は昌倪であり、昌倪の兄が昌琢である。嫡流ではないものの、「里村南家」という家に注目すれば、昌琢の「聞書」が、昌隱に伝わったことは何ら不可思議ではあるまい。奥書を信じれば昌琢の「連歌新式」の講釈が行われた元和三年（一六一七）からおよそ三十年後に写されたことになる。

この「聞書」の諸本については、木藤氏が『連歌新式の研究』で、国会図書館に所蔵される『連歌合集』（第二集）収録本、同じく国会図書館所蔵の『新式並追加』（ほ、35）の二本をとりあげられている（二三五頁）。

その内容については同じく木藤氏が以下のようにまとめておられる（一三五頁）。

最初に、本式・新式・追加・新式今案の解説、連歌の由来、宗祇の出自・学統、宗祇より古今伝授の次第等について記した上で、韻字事以下体用事に至るまでの新式の本文に注解を加え、さらに「連歌初学抄」と題して賦物篇の後半の部分・応安五年の新式の奥書・享徳元年の新式今案の奥書・和漢篇の本文・文龜辛酉の肖柏の奥書を掲げて、これにも注記を加える

細かな異同はともかく、本文の内容・構成については、国会図書館所蔵本との大きな相違は認められない。したがって「新出資料」ではなく、校異に用いることができるという価値にとどまる。なお「連歌新式」の「法」の書入れに此一ヶ条諸本ニハ塵ト云字ノ次ニ入昌陸本同前

とか「異本如此」などとあり、里村南家関係者で書き伝えられていたと考えられる「連歌新式」には、異本があったことがうかがわれる。

本書は、「朱書」とは別に、後に補われたと考えられる墨書の書入れが少なからずほどこされている。1「私云」とあるもの、2「叱」とあるもの、3「仲」とあるもの、4「心前」とあるもの、4「昌陸云」とあるもの、5「云」がないなどするものである。5には、1「私云」が含まれている可能性もあるが、1「私云」と明記されているものは多くない。また「私」が誰であるかは不明である。参考までにその書入れを二つあげる。

一つは「牡丹」の「聞書」に

廿日草と云は、哥へ咲しより散はつるまで見し程に花の本にて廿日へにけり依_レ之云と也へ但此哥ハ桜のため

よめるなど云り、花はつほむ間七日、開間か七日、散間か七日、合廿日ト也

とあることについて以下の書入れがある。

私云咲しよりの哥桜をよめると云説其義不叶其故ハ蓄ム間七日開間七日散間七日合廿日と也。然ルニ咲しよりとあれは咲間七日散間七日合て十四日也廿日之數ニ不_レ当只牡丹をよめる哥と決シテ可也

・私考白氏文集第四

牡丹芳

千片ノ赤英霞爛々

百枝緯点燈煌々

花開花落ルコト二十日

是牡丹ヲ廿日草ト号スル證明白也

今一つは「聞書」にある「ゆうだつとしても一也」についての書入れて、以下のようにある。

私云タダツトスレハタニ折立ニ五句タ時分ニ五句也降物ニ二句也

とある。「私」がどのような立場の者であつたかが不明のため、どの程度影響力があつたかなど不明だが、近世連歌を理解する一資料にはなりうるものと思われる。

2 「叱」、3 「仲」、4 「心前」とあるものも少ない。それぞれ一例をあげる。

まず「叱」の例をあげる。「叱」は昌叱のことであろう。「海」の箇所以下に以下の書入れがある。

後へ庭たつみは、庭のたまり水故海のさはなし、水辺ニ二句水ト云字ニモ二句叱、ふり物ニ二句叱、居所ニ五句叱、折替て庭ノ外ニ有叱

とある。はじめに置かれた「後」は、後に書き入れたことを示すものである。

心前の例をあげる。

へ・後^{ノチ}普光園^{ツツ}御筆^{ツツ}御筆ノ肖柏^{ツツ}書入^{ツツ}之^{ツツ}ラ

へ後とハよむへからず、天子の御名斗音によむ也、

後徳大寺左大臣、後京極と云ハ、むかしよりよみ

つけたれは也、園ハ^{シヤツエシ}園^{シヤツエシ}なと云て処と云ほと

心也、又院の心也 園ノ字ニ院ノ字ノ心アルニヨリ院ノ字不書也 心前

とある。「古典文庫二二」に翻刻された「心前注」には「園ノ」云々の記述はない。

次に「仲」の例をあげる。「桜」の項に以下のようにある。

後々桜二ノ外ニ紅葉ハ夏歟他季ニ二ト也 仲

また「天字」の項では以下のようにある。

へ・天字肖袖 四也、銀川アツカハ、昌陸説同之ハ五句也、

後々天字天津天乙女ナト折ニ一つ也天ニ、空、雲居、久堅、中空ナト皆二句也 心前

後々天ニ銀川二句歟五句歟可依時 仲

「仲」は紹巴次男の玄仲（一六三八年没）と考えてよいだろう。書き込みは、量的には多いとは言えないが、近世初期の連歌師としては看過できない一人である。

三

書き込みに関しては、量的には4「昌陸云」とあるものが多く、昌陸の説は、里村南家に関する調査の上では注目してよい。

昌陸は宝永四年（一七〇七）没、享年六十九歳で、約四十年も柳営連歌に一座した。父は昌程、その父が昌琢であり、里村南家の嫡流であるからである。木藤氏が『連歌新式の研究』でとりあげた「昌琢の注」の箇所には次のものがある（一四一頁）。

老（只一、鳥木などに一）老と云連歌、四十より内には不可仕也。四十初老也。老の鶯・老木の花などはすべし。

四十已後、やがて老らくなど歌によむ、（不）嫌也。

木藤氏は「不」として、その注で

昌琢の注には、「嫌也」とあるが、「不」を脱したものと考えられる。

としている。筑波大学所蔵本は以下のようにある。

へ・老 只一鳥木などに一 へ老と云連哥、四十より内ハ不可仕也、

四十初老也、老の鶯、老木の花などハすへし、

四十已後、頓まじり而老らくなくと、哥二よむ嫌也、連歌ニモ同前ト也 昌陸云

「へ」「・」「ゝ」は朱書きである。「連歌ニモ同前ト也 昌陸云」があらたに書き入れられたものである。昌陸は、寛永十六年（一六三九）の生まれであるから、奥書に見られた慶安二年（一六四九）はまだ数えて十一歳であり、このようなことを説くことはできなかったと思われる。となると、まずは昌陸のもとで写された本があり、後にこれに書き入れたか、あるいは書き入れた本を転写したという可能性が考えられる。筆跡の印象からして、前者ではないかと思われる。いずれにしても「昌陸講談同之」とあり、「一座二句物」の「春風」「秋風松風」の項の書入れに

春風秋風ハ昌陸モ此聞書ノ通りニ云リ

とあることからすると、昌陸が「連歌新式」の講釈をすることがあり、講釈のどの程度の割合を占める内容が記されたかは不明なもの、その聞書が書き入れられたものが筑波大学所蔵本ということができよう。なお「花」の項に「花ニ桜付くハする也。口伝有之」の書入れに「此ノ一ケ条昌陸ハ何トモイハレズ」とあり、「口伝」とされるものについては講釈されなかったようである。

また「一座二句物」中に

へ・猿 只一ましら へ・旅字 只一旅衣など云て近代不及其沙汰 へ・命 只一虫の命など云て一

とあり、「命」の右わきに朱書きで

以諸本之次第爰言入也昌陸本ニモ爰ニ入也此ノ一ケ条在奥

とあり、「法」の項では、

此一ケ条諸本ニハ塵ト云字ノ次ニ入昌陸本同前

と書入れがある。「昌陸本」がどのようなものであったかがわからぬため憶測にすぎないが、「昌陸本」に昌陸の書入れがあり、それが筑波大学所蔵本の書入れに反映された可能性は指摘しておく。

筑波大学所蔵本の書入れにみられる「昌陸の説」は、主に「昌陸説同之」等とあるものと「昌陸云」とあるもの二つがある。また「花ニ桜付てハする也、口伝有之」および「はなやかにと云詞」に「此ノ一ケ条昌陸ハ何トモイハレズ」と書入れがあり、「谷の戸」に「昌陸ノ講ニ此一ケ条不レ及ニ沙汰ニ」とあり、昌陸の講義でとりあげられなかった項があったことが知られる。量的な点に着目すれば、「昌陸云」とあるものもつとも多い。

先に述べたように、昌陸は里村南家の嫡流であり、寛文十一年（一六七二）から柳営連歌の発句も詠じている。柳営連歌は、近世連歌の中核であり、その影響も少なくない。昌陸が発句をつとめた連歌を式目的視点から分析するにあたっては、筑波大学所蔵本の書入れは看過できないものであろう。

〔注〕

(1) 『連歌論集 1〜4』(一九七二〜九〇年、三弥井書店) 他。

(2) 浅井美峰他「報告・国文学研究資料館所蔵木藤才蔵コレクション」(『連歌俳諧研究 第四百十三号』二〇二二

年九月十五日) 参照。

付・「昌陸云」とある書入れ

『連歌新式追加並新式今案聞書』の全文を翻刻することが望ましいが、紙数の関係で「昌陸云」とあるもののみを翻刻する。

- ・昌陸云款冬一ツ有テ又款冬色ノ衣有リト也春や植物二二句也 此説不慥可尋
- ・昌陸云此ノ詩ソウケイレングガ詩ト也

注：「牡丹」の「聞書」に「日本ニハ桜なり桜詩ニ、賞桜日本盛於唐 如彼牡丹兼海棠 恐是趙昌所難画 春風纔起雪吹香」とある漢詩についての書入れ。

- ・昌陸云時鳥過テ異名歟カクシテカノ内ニ又一ツ有リ

注：「郭公」の「此外ほどゝきすすぐる」（濁点は朱書）への書入れ。

- ・昌陸云雪ハ霜月ヨリ降ト也

注：「村雨」の「十二月ハ、雪なとふる物也」への書入れ。

- ・昌陸云板ニ五句衣ニ二句衣類ニ二句也

注：「礎」への書入れ。

- ・昌陸ハ不レ從レ此ノ説也

注：「虫」の「聞書」の「松虫、鈴虫、二句なからあらん事にてあると也」への書入れ。

・昌陸云今案ニハ春雨ト小雨トノ間ニ秋雨ト云字入テアレトモ不_レ宜詞故ニ肖柏被_レ除_レ之也

注…「春雨小雨等_{急雨之}」への書入れ。

・春風秋風ハ昌陸モ此聞書ノ通りニ云リ

注…「聞書」の「是もの文字入て二句ハなし、又、秋と云字むすひて、つゝかすハ二の外ニも又一あるへき歟、春同前自然の事也」への書入れ。

・昌陸云外ニ心ノ猿又有り心ノサハカシキ事也

注…「猿」への書入れ。

・連歌ニモ同前ト也 昌陸云

注…「四十已後、頓_{生して}而老らくなと、哥ニよむ嫌也」への書入れ。

・昌陸云サヒシキサヒシキサヒシクサヒシクト二ツハナシサヒシサヒシト二ツハ有ト也

注…「さひしき いひかへて又一」への書入れ。

・昌陸云翁サビ神さび物さひなと之内只一ツ也サビト云テハ只一ツト也

注…「紙さひてハ折也」への書入れ。

・季秋 昌陸云

注…「梢の秋」への書入れ。

・昌陸云稲葉の雲風躰ニ二句也

注…「稲葉ノ雲トハ風ニいなはの末なひくかげ、雲ノ如クにミゆるを云也、巴」への書入れ。

・高岑モ岑ニノ内也鶯ノ岑雲ノ岑モニノ内也雲ノ岑ハ時ニヨリ二ツノ外ニ可_レ有也 昌陸云

注…「峯」への書入れ。

・詞 葉ニ二句言葉コトノといへは葉ニ五句也 昌陸云

注…「こと葉」への書入れ。

・苺苳草苳共ニ本苳ノ内也苺苳ハ夜分植物也草苳夜分也依レリ句ニ不レ可レシ為ニ植物ニ此ノ外折替テタカシ簾可レ有簾夏也夜分也寒暑ノ類ニ二句也非ニ植物「昌陸云

注…「苳」への書入れ。「昌陸云」の後に「私云ムシロ畢竟三ツ也苳一席一簾」とあり。

・昌陸云 ニツノ外ニ涼シキ道又可レ有極樂ノ事也彼ノ岸岸ニツノ外ニ有ル類也

注…「涼夏の外可有 夏一秋一」への書入れ。

・余花ハ若葉ノ花夏咲花時鳥に結ふ花など皆余花也青葉ノ花ハ春也 昌陸云

注…「花」への書入れ。

・昌陸云 花皿本植物也正花也

注…「花」への書入れ。

・昌陸云 只一ツ藤原藤氏藤衣ノ内ニ一ツ也三ツ共ニアツカヘハ春ニ成也植物ニ二句

注…「藤」の「聞書」の「只一、藤原一、以上二也」への書入れ。

・昌陸云 柳散ルニ紅葉ト斗モ二句也

注…「柳」への書入れ。この後に「私云惣テ散ルト云ハ葉ノコト也物替リテモ散ト云ニ葉ノ字ニ句嫌也」とあり。

・昌陸云 桜ノ紅葉七月ノ末也

注…「桜」への書入れ。

・昌陸云 只ノ紅葉過テ草ノ紅葉ハ不_レ可_レ有也

注…「紅葉」への書入れ。「二説ニハ只ノ紅葉過テ草ノ紅葉もなしと也可依其時ト也 仲」とあり。

・昌陸云 落葉ト木葉當時ハ季替リテハ二ツ有也柳散ルナト二折也柳散ル有レハ名木ノ散ル此内ニコモル也

注…「落葉」の「聞書」の「季かはりても一也」への書入れ。

・昌陸云 荻一他ノ季ニ一以上二ツ也浜荻昔ハ雜也當時ハ秋ニ成也仍テ秋ノ荻ノ外ニ無シ芦ニ面ト云説有リ玄仍ハ一向不_レ嫌イヘリ又五句ト云説有ル也五句ニテ可_レ然也

注…「荻」への書入れ。

・昌陸云 三ツノ外ニ都鳥か月ノ都かの内ニ一ツ有り都鳥ハ水辺也冬也

注…「都 只一名所一旅ニ一」への書入れ。

・昌陸云 焼塩ノ内也

注…「塩」の「聞書」の「もしほ草、焼塩の外ニ有か無かの沙汰有、巴抄ニも有と義あれとも、ゆくしほの内也」への書入れ。「後 もしほ、焼塩ノ内也 仲」ともあり。

・昌陸 …ハ大鷹ナレトモ秋ノ狩ナル故ニ當時ハ大鷹有テ初鳥狩又有ル也小鷹狩有リテハ初鳥狩無シ

注…「狩」の「聞書」の「初鳥狩」^{ハツトガリ}への書入れ。

・昌陸云 一ニ雉二句也

注…「狩」の「聞書」の「鷹に雉」への書入れ。

・昌陸云 …ニ鶉二句也

注…「狩」の「聞書」の「小鷹ニ鶉」への書入れ。

・昌陸云 庭鳥ト云時ハ庭ニ二句也庭ツ鳥トイヘハ庭ニ面也砌ニモ面也

注…「鶏」への書入れ。

・昌陸云 関三ツノ外ニ水ヲ塞面替テ有之

注…「関 只一名所ニ一恋ニ一春秋をとむるなど云て一恋又春秋などの間ニ一可然云云」への書入れ。

・昌陸云 薄氷モ氷ノ内也春ニハ氷リト云テモ薄氷ト云テモ氷リノ類只一ツ也

注…「氷」への書入れ。

・昌陸云 氷ト云テハ只一ツ也

注…「氷」への書入れ。

・昌陸云 入相ニ朝時分付テハスル也ノキテハ二句嫌也

注…「鐘 只一入相」への書入れ。

・昌陸云 不_レ宜詞也―同前狐火ともすハよしと也

注…「螢火」への書入れ。「―」は「狐火」。

・昌陸云 鳥ノ寝ニ蝶ノヌル折也

注…「寝字」の「聞書」の「人倫之寝ハ。萩、鳥、蝶などの寝ハ五句也」への書入れ。

・昌陸云 前ノ世後ノ世モ当時ハ述懐ノ世ニ成也述懐ノ世モ尺教ニムスヘバ述懐ハ消テ尺教ノ世ニ成也述懐ノ世恋ニ

ムスベバ述懐ハ消テ恋ノ世ニ成也哀傷ノ世ハ述懐ノ世ニ成也哀傷モ尺教恋ニムスヘハ哀傷ハ消テ恋尺教ニ成也

注…「世」の「聞書」への書入れ。

・昌陸云 此ノ一座五句ノ物今案ニハ無_レ之

注…「橋」への書入れ。

・浮橋モ浪ノ浮橋ナト常ノ橋ニシタルハ只ノ橋ノ外ニ無シト也 昌陸云

注…「うき橋」への書入れ。

・昌陸云 窟ニ屋面也ト昌琢ノイヘリト也 陸云 屋ニ面居所ニ二句也打越也

注…「岩屋」への書入れ。

・昌陸云 旅ノ故郷居所ニ五句也

注…「皇居之故郷ニ居所」への書入れ。

・昌陸云 朧霞ニハ二句雲ニハ不_レ嫌

注…「霞ニ朧」への書入れ。

・昌陸云 アツカヘハ生類ニ二句ト也アツカハネバ生類ニ不_レ嫌也

注…「時分与時分」への書入れ。

・昌陸云 星月夜モ当時ハ本月ニ成也

注…「日二月次の月」の書入れである「後 星月夜も月次之月と也され共夜分也」への書入れ。

・昌陸云 当時ハ月次ノ月ニ在明不_レ付五句嫌也

注…「日二月次の月」の「聞書」の「月次之月ニ有明付てハ不苦のきてハ二句ト巴説」への書入れ。

・昌陸云 秣馬ニモ駒ニモ面也

注…「秣」への書入れ。

・昌陸云 芦ニツノ外ニ芦鶴芦鴨ノ内ニ二ツ有ト也

注…「冬枯の芦や芦火等ニ水辺」への書入れ。

・馬ノ鼻ヲ道へ引ムケテ旅立義也向ト字ニハ不_レ嫌也 昌陸云

注…「馬のはなむけ」への書入れ。

・昌陸云 信夫ハモトヨリ所ノ名也然ルニ浦ト云斗ヲウラミトヨセタル時ハ信夫ハヤハリ名所ノマ、也ケ様ノ句有リ
テハ外ニ信夫山信夫ノ岡不_レ可_レ有信夫ヲモヨセテ人ヲ忍ふのウラミナト云タル時ハ又外ニ信夫山カ…ノ岡可_レ有
事ト也

注…「忍ふのうらみ侘なと云句」への書入れ。

・昌陸云 温長閑うらゝか同季ナレハ折嫌也春ノ長閑に冬の温ナト季替レハ二句也

注…「温日と長閑」への書入れ。

・苔の袖ニ墨染の衣ト今案ニ入テ有ルト也 昌陸云

注…「明ニ曙今日ニ昨日明日・弓ニ矢」の「・」の箇所への書入れ。

・木枯 昌陸云 枯ニ折也水ノカル、ニハ面也

注…「木枯」への書入れ。

・入逢 昌陸云 日没トモ書也

注…「入逢」への書入れ。

・昌陸云 風躰ニ荻ノ焼原モ二句ト也

注…「荻の声」の「聞書」の「風の心もちたるニハ二句也」への書入れ。

・昌陸云 かた斗なと云かたノ字形見ノ形ニ二句ト五句ノ説有リト也

注…「形見二見」への書入れ。

・昌陸云 物思ふモ物ニモ思ニモ二句ト巴ノイヘリト也腸ト云字ヲヨマセタルト也

注…「物思ひニ物ノ字思ノ字」への書入れ。

・昌陸云 世捨人トツ、キテハ大方尺教たるへし尺教ノ世ニ成也

注…「捨世ニ桑門の世捨人」への書入れ。

・昌陸云 みましとよむ説モアレトモ大方おましとよむ也

注…「御字」の「御座」への書入れ。

・昌陸云 明石ニ石岩ニ句ト五句ノ説有リイツレニ成共可_レ從也明石ニ明ノ字ニ句也

注…「明石ニ石岩」への書入れ。

・昌陸云 …ハ宮ニモ都ニモ面也都ニ神祇ノ宮モ面也

注…「宮城野は面を可_レ嫌かと也」への書入れ。

・昌陸云 生ル_{ウマ}、モ今ハ述懐ト也

・昌陸云 山住古跡ナトハ非ニ述懐也

注…右二つ「述懐と述懐」への書入れ。

・昌陸云 高キ植物ト高植物之間唱同シキハ折也唱替レハ面也松原ト檜原トノ間折也松原ト柞原トノ間ハ面也ハラワ

ラバラ此間唱替レハ面也早キ植物ト早キ植物同前也高キト早キノ間ハ唱同シキハ面也唱替レハ五句也

注…「松原」への書入れ。

・昌陸云 田ニモ返ニモ二句也

注…「たかへす八田ニも二句云々」への書入れ。

・昌陸云 織女ノ衣依句衣類ニ二句ト巴ノ云ト也霞衣同前

注…「織女の衣」への書入れ。

・昌陸云 松虫ハ陰ノ松虫トシテモ五句也人を待てふ虫ナトスレハ松ニ二句待ニモ二句ト也昌琢ノ説ト也

注…「松ノ字く松ニ五句」への書入れ。

・昌陸云 田上田ニ二句也大方谷上ト書也谷ノ字ニハ五句也

注…「田ノ字 生田田上浮田森等」への書入れ。

・昌陸云 新式ニハ水音の雨ト云詞入テ有リ嫌詞ナル故ニ肖柏被_レ除_レ之乎

注…「川音の雨・いづれも非ふり物雨ニ雨也」の「・」への書入れ。

・昌陸云 泪の雨ハ非降物泪の時雨ハ季をもつ故に降物ニ打越ヲ嫌也

注…「涙の時雨」への書入れ。

・明石 昌陸云 水辺之躰也須磨同前

注…「須磨明石」への書入れ。

・昌陸云 関伽ハ水ト云ノ梵語也重言ナレトモアカ水トシキタレル也

注…「関伽結」への書入れ。

・昌陸云 躰用ノ外也

注…「手洗水」への書入れ。

・昌陸云 軒ノ垂氷ハ降物なくても昌叱ハせられし也不_ト可_レ苦也

注…「たるひ」への書入れ。

・昌陸云 鈴鹿八郡ノ名也

注…「鈴鹿」への書入れ。

・昌陸云 鶴林当時ハ植物ニ不_レ嫌鷲峯山類ニ不嫌

注…「鶴林」への書入れ。

・昌陸云 春日祭ノ事公事根元ニ委シト也

注…「春日祭」への書入れ。

・南祭 昌陸云 公事根元ニ委シト也

注…「南祭」への書入れ。

・縣召 昌陸云 公事根元ニ委シト也

注…「縣召」への書入れ。

・昌陸云 志賀山越当時非_レ春_ニ也

注…「志賀山越」への書入れ。

・稻妻 非_ニ天象_一 稻_ニ五句妻_ニ二句也 昌陸云

注…「稻妻」への書入れ。

・昌陸云 葉ノ字ニ桐ト云字不_レ可_レ付巴ノ説ト也桐ハ葉ヲ賞翫ノ物ナル故也

注…「桐」への書入れ。

・昌陸云 季ヲモツ故ニ生類ニ二句也

注…「鶉衣」への書入れ。

・昌陸云 只ノ鶉過テ鶉衣又可有也

注…「鶉衣」への書入れ。

・昌陸云 萩ノ枯ニモ穂ト云字ヲ結ハ秋也

注…「萩薄のかるゝも穂并色をいるれハ秋也」への書入れ。

・昌陸云 星月夜秋ニ成故其面ノ月ヲ可_レ持_ツ之由昌程イヘリ是ハ可_レ依_レ時也 其ノ面ノ月ヲ持_ツニ決セリ 陸

注…「星月夜」への書入れ。

・昌陸云 扇ニ風付ルコト不_レ苦云説アレトモ當時ハ大方悪シキト也

注…「扇を置」への書入れ。

・昌陸云 面ト也

注…「庭火ゝ庭ニ折砌ニハ面敷」の書入れ。

・昌陸云 紅葉かつ散ルハ秋也

注…「紅葉散て」への書入れ。

・昌陸云 続古今ノ哥に霧深き賀茂の河原に迷ひしやけふの祭の始なるらん

注…「北祭」への書入れ。

・昌陸云 源氏匂宮卷などにも小忌にて―と有り

注…「小忌衣」への書入れ。

・昌陸云 日蔭ノ糸植物ニ二句也日ニ五句陰影ニ二句ト也然トモアシライナクハ日ニモ可_レ為_二句_一也

注…「小忌衣」への書入れ。

・昌陸云 蓬カ柚柚ニツノ外ニ又可_レト有也

注…「蓬」への書入れ。

・昌陸云 浅ノ字ニ五句也

注…「浅茅」への書入れ。

・昌陸云 カゲロフモユルナトハ春也虫ノ事ニスルハ雑也秋夏ト云説アレトモ此ニ雑ト出シテ有ル上ハ雑ニナシテ可_レ置也

注…「蜻蛉」への書入れ。

・昌陸 緑添モ春也

注…「みとりそふも可為春歟但不審」への書入れ。

・昌陸云 里神楽居所ニ二句也

注…「里神楽」への書入れ。

・昌陸云 禁中又社ニ有リ神祇ニハナラザル也

注…「御階」への書入れ。

・爪木 昌陸云 積_{ツマギ}ト書也木ニ二句也モトツミ木ト云事ナルヘシマトミト五音相通也

注…「爪木」への書入れ。

・昌陸云 大方竹ノ字ヲ書也根本ハ多_タ氣トカクヘシ多氣郡ニ有ル故ニタケノ宮タケノ都ト云也

注…「竹宮」への書入れ。

・昌陸云 絹ト云字ニ五句也

注…「衣々」への書入れ。

・春ノ句同前ト也 昌陸云

注…「平秋の句ニ恋の秋の句付て又平秋の句不可付く 他准之」への書入れ。

・昌陸云 桜田ハ田ニ苗ノ生ルカゴトク桜ノ多ク集リテアルヲ云ト也

注…「桜田」への書入れ。

・昌陸云 フレカスル心也ソレハ非^レ春非^ニ簞物^一也然トモフレカスル心ニ用ル事ハ稀也依テ当時ハ春ニ成テ簞物ニ二

句也

注…「棕」への書入れ。

・^{ネラヒカサ}認狩 昌陸云

注…「ねらひ狩」への書入れ。

・八月十五夜ニ始メテ大塩也依テ初塩と云也伍子胥ガ古事ヨリ起レル也 昌陸云

注…「初汐」への書入れ。

・昌陸云 忍摺ト斗ハ非^ニ衣類^一非^ニ植物^一非^レ秋忍ニ面也名所ニハ三句也昌叱ハ忍摺ト斗ハシガタシト也然トモ錦ヲ着^{キル}

ナト云類ニテ忍摺ト斗モシラルヘシ色ナトムスヒテハ秋也ウヘ物ニ二句也

注…「忍摺」への書入れ。

・昌陸云 おほつかなきハ無ニ二句ト也

・昌陸云 山賤ニ賤折也賤ニいやしきハ面ト也

- ・昌陸云 スソ野末ニ二句也麓ニ二句可レ嫌カト也
- ・昌陸云 鞠ノ庭当時ハ場ノ字ニ落着也庭ノ字ノ事ニ用タル句ハ可レ為「各別」也
- ・名神 昌陸云 当時ハ氏神モ名神ニ成也
- ・昌陸云 カラ国。モロコシ過テ唐衣カラ撫子ナトノ内ニ又一ツ可レ有也カラト云テニツモロコシト云テ一ツ已上三ツ也
- ・昌陸云 只ノ麓過テ歌ナトニヨミタル名所ノ麓アラハ又可有也
- ・昌陸云 柚只一名所ニ一也ニツノ外ニ蓬か柚ハ又可有也
- ・昌陸云 干潟ニ塩折也
- ・昌陸云 住吉ノ汀ナトハ又有ル也
- 注：「名所ニ汀ト云事あらハニあるへし」の書入れ。
- ・昌陸云 洲ニ真砂折也岩ナトハ面也
- ・昌陸云 流ニツ也一ツハ動又流也ナカレナカレトニツハ有リナカル、トニツハ無シ
- ・軒門窓ナトノ類宮寺ニムステハヤハリ居所ニ二句也 昌陸云
- ・新式ニハ垣ト云字入テ有リト也 昌陸云
- ・昌陸云 賦物ヲ置クコト何レノ世ヨリ始レルカ不レ知也本式ニハ先ツ賦物ヲ取テ十句ノ内不レ犯「其ノ字」也
- ・昌陸云 四字上下略ハアマリ長くシキ故に近年ハ不レ取也

【附記】本稿は「令和三年度 国文学研究資料館所蔵木藤才藏コレクションの基礎的研究」に拠る。ご教示等たまわつた神作研一氏には厚く御礼申し上げます。